

新編常陸國誌

佛寺故城

三十三三四

和書門		三六四七八	類
冊	架	函	號
174	18	31	160

內閣文庫		和書	三六四七八	類
冊	架	函	號	
174	18	31	160	

內閣文庫		番號	和 36478
冊數		31 (18)	
函號		174	160

内一〇九二二號



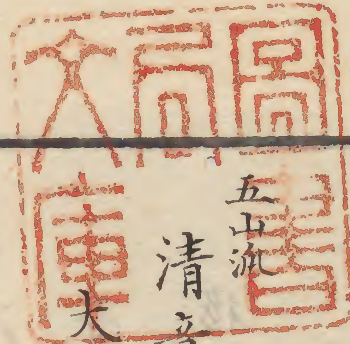
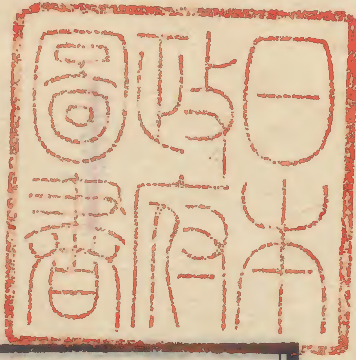
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





新編常陸國誌卷之三十三

内一〇九二二號

佛寺

隅東柳洲

中山信名平四修

臨濟宗

五山派

清音寺

茨城郡古内村
和南禪寺附庸無木寺

朱印地百五十石
當高二百四十二石
一斗五升六合

五山派

正宗寺

久慈郡増井村
鎌倉内覺寺末

朱印地百石

万秀山ト号ス。○佐竹家譜戸村云、増井正宗寺ハ貞義
公ノ御子、月山和尚、天竜寺ニテ、学問トサレ、常陸ハ御
下向、正宗寺ヲ開基トサレ、天龍寺ノ佛法トリ、五木
骨ノ印トシ、晨睡和尚ハ、義舜公ノ御舎弟トリ、其以
後、天敬、固崇和尚ハ、義昭公ノ御舎弟トリ。

勝樂寺 正宗寺境内

大瑞山ト号ス、正宗寺佛殿ノ西ニアリ、弥陀觀音勢至三尊

ノ古佛ヲ安ス、一字ノ堂ナリ、寺説云、鎮守府將平良將
ノ建立ニテ、増井寺ト号ス、時律宗ナリ、後源義家奥州下
向ノ時、此地ニ屯シテ、賊軍調伏ノ法ヲ修シ、乱平テ、帰洛
ノ時、又此地ニ屯シテ、増井寺ヲ中興シテ、大瑞山勝樂寺ト
号シ、密宗ニ更ム、二百余歳ノ後、月山和尚コノ寺ヲ住持
シ、夢窓圓師ヲ請テ、関山始祖トシ、月山二世ノ開基ト成
ト云、正宗寺旧記云、佐都、西郡、太田、御増井村、太瑞山勝樂
寺ハ、延長年中創建、檀那ハ平良將ナリ、本ハ律宗、然而百
二十余歳之後、永承六年、八幡殿奥州安倍貞任宗任御退

治之時、從京都明王院快季僧正二位僧都祐并西人下向、
於此所調伏之壇ヲ立、尔来為密崇宗二百余歲、至於眞朝僧
都之代、月山和尚御見之時、登京都夢窓国師之御弟子ニ
十リテ、禪宗下十リ、給テ眞朝僧都ハ延文二年丁酉七月
十日寂滅、無月日ニ行事テ今有之トアリ、按ニコノ寺、コノ
地ニテ根本ノ寺院トレトモ、月山正宗寺ヲ起サレテヨリ、
コノ寺返テ其殿院ノ如ク成テ、今ハ全ク塔中トナレリ、
空華集ニ嘗有テ詠セル詩多クノス、○送善侍者之常州
勝樂蓮社荒涼數百年、近來見說草為禪、野狐驚出野狐窟、

竜象踏閑竜象筵、要使叢林如百丈、須教号令肅入天藕花
池上旧時月、應想向君分外圓、○除夕宿常州勝樂寺戲呈
隣壁友人、天涯臘尽客思卿、正步村々歲更忙、竹葉誰家閑
蓋早、松枝幾処挿門長、多情有句添新卷、一箇無錢看旧囊、
為謝梅華恰寂寞、隔籬一夜暗吹香、○常州勝樂親建方丈
立規何必方々丈、寬著虛明屋七間、一等不行摩竭娑令人来
問法便問閑、○和石室韻賀序書記住常州勝樂間世曇華
大瑞翁策勛不減仲靈嵩、赤心輔教明如日、雄辯非韓疾似
風、蒼苔叢林香靄々、梅檀樓閣勢隆々、扶顛起廢期公久、果

見一枝吾道東

五山派

正林院

久慈郡馬場村
增井正宗寺末

朱印二十石

梅香山下号入

五山派

祥光寺

真壁郡本木村
鎌倉建長寺末

朱印二十石

五山派

江畔寺

那珂郡上小瀬村
增井正宗寺末

朱印地十五石

當高十五石
一斗三升一合

南内山下号入

五山派

光明寺

真壁郡山尾村
鎌倉建長寺末

朱印地七石

竟江禪師當寺三住居ノ時、義堂和尚ノ詩了、以空華集云

芝華贈東侍者歸常州、兼簡祥雲象田光明竟江二禪師、東

敏故国莫愁程、紙纈兼將畫錦榮、好看望山々脚下、祥雲影

現佛光明、永祿天正ノ比真壁ノ城主右衛門入道々夢ノ叔父在閑ト云僧住持セリコノ僧盡テヨクスト云

五山派
安樂寺 院₁真壁郡長岡村
鎌倉建長寺末

朱印地^{十一}五石

長勝寺

坊方郡潮来村
京都妙心寺末

朱印地十石

當高十二石
二年六升

根本寺

麻島郡麻島宮中下生村
京都妙心寺末

朱印地百石

麻島神領二十石
石内配當無別印章

瑞甕山ト号ス本尊兼師如来左右釈迦弥勒三尊坐像各
臺坐ヨリ後光迄一丈四尺、股立不動毘沙門立像一丈十
二神立像各四尺六寸、皆聖德太子ノ彫刻也、開祖ハ高麗
国ノ惠灌大僧心、三論宗ナリ、古来ノ木像今ニ存ス、其後
法相天台等ノ諸宗轉住ス、文祿四年八月三佛堂修補勸
進帳云、傳云昔當推古天王御宇、聖德太子奏聞曰、夫東奥
常陸国麻島郡者、吾日域之東北、而夷狄迎陋之地、民間心

暴惡、知道者以加之當王都鬼門、且諳須弥東州藥師瑠璃
光如來為教主之地也、思此觀彼、一為帝國鎮護、一為衆民
修善莫惡、卜地而將建立伽藍、王道輔弼、何以敵焉、雖然聖
意難計也、勅曰、公之所謂尤以當道、朕爭肯為不善之乎、公
疾行創儀、而佐朕道也、依之創立當山、到藥師釈迦弥勒三
佛尊像、立不動毘沙門十二神將、聖德太子手自制作、以奉
安置當寺云、至今其聖作之尊容現也、因茲觀之、甕山者
為日本鬼門、皇國鎮護所建立之道場明白也、云々法相天台
等轉住ノ處、建久二年當寺破壊ニヨリテ、鎌倉殿再興セラ

ル蒙古乱ノ時、天子ヨリ勅印ヲ賜テ、異賊進討ノ祈禱ヲ
修ス、程ナク靜謐ス、印文天下平均異國歸伏ノ字アリ、裏
ニ勅蓋ノ二字アリ、今ニ存ス、實ニ奇代ノ銅印ナリ、康永
年中ニ至テ、又大破ニ及フニ依テ、光明帝ノ勅アリテ、入
京ノ教外得藏和尚住持ヒラレ、始テ禪林トナル、同四年
遷化セラル、二世大圭和尚ナリ、延文三年義詮將軍佛殿
ヲ再興ス、コノ時後光嚴院勅額ヲ賜フ、祈禱ノ二字アリ、
應永十年大圭和尚入寂ス、コノ年妙心寺授翁和尚ノ法
孫華藏和尚ノ弟子景藏主當國守護ノ請ニ依テ、住職ト

十、第十三世立之岳和尚永正十五年迁化、十四世麟翁禅
和尚天文十三年迁化、十五世雪庵白和尚天正六年迁化、
十六世如堂和尚天正三年迁化、十七世天桂棟和尚、ノ年
入院、是時ヨリ妙心寺未トナル、コレマテ鎌倉五山輪番ナリ、
慶長二年玄桂寂ス、コレヨリ漸ク棟藏主者坊ス、慶長
七年第十八世舜峯熙和尚入院、コレヨリ今ニ至テ相統ス、
毎年正月、幕下ニ謁シ、歳始ヲ賀ス、

楞嚴寺

茨城郡片庭村
京都妙心寺末

朱印地五石

佛頂山下号ス、笠間城記云、古昔律僧居之、罹^罹火災而不能
再営、比丘去他邦矣、而后長門守時朝請大拙和尚、再建精
舎、繇^繇芝草律為禪美、山号佛頂寺、称楞嚴也、以宋朝千岩禅
師為開山、以本邦大拙和尚為開基也、惠心僧都昔在佛頂山、
彫刻千体佛、本尊千手十一面觀世音、魁首之佛也、世称笠間
千体佛者、悉出自楞嚴寺、服立不動毘沙門兩王者、運慶之
作也、慶安元年秋八月大猷院殿賜寺領五石之御朱印於
楞嚴寺、云々、按ニ大拙、康永永和ノ人ニシテ、天時朝ヨリ、

遙ニ後ノ人也。當時ノ城主大拙ヲ請ヒシナリ。時朝トス
ルモノハ非ナリ。延宝傳頂錄云。相州建長大拙祖能禪師
云々有建長招府帖。至三始出常州。立間郡主草律寺曰佛頂
山楞嚴寺。請為開山。祖入寺指門曰。諸佛玄門。言思不及。大
地衆生。如何得過。以手作推勢曰。入衆及三万余指云々ト
アリ。コノ寺ニ開基大檀越ノ故碑アリ。晏翁海公大居士
九月十二日卒。年号ヲトアリ。以テ時朝ノ碑トス。誤ナリ。
時朝ハ永文。年二月九日ヲ以テ卒ス。コノ海公ハ蓋大
拙ヲ請ヒシ人ニテ。康永永和比ノ城主ナリ。

大光傳ニ常法雲
清音禪源トシテノ開
ノ所ナリト云禪源
何ニアリヤ

法雲寺

新治郡高岡村

大雄院ト号ス。大光禪師ノ開基ニシテ。中峯一派ノ本寺
ナリ。自称シテ勅願所ト云。僧宗久都ミヤコ之ツト云ク。サテ相
摸国鎌倉山ノウチト云所ニ行ツキテ。ソノアタリニ假
ノヤトリヲ尋子ト、マリ侍リシニ。行脚ノ僧ヲトアマ
タマリシ中ニ常陸国タカラカト云処ニヤンコトナキ
智識オハストカタル人侍リシカハ。ヤカテ尋子マカリ

又、法雲寺ト云寺アリ、宗已庵主トテ、空岩和尚ノ高弟ニ
テオハシケルカ、在唐久シクシ給ヒテ、天目ノ中峯和尚
トトニモマミエ給ヒケルトカヤ、世ヲスツルトナラハカ
クコソアラマホシクオホエシカハ、其山ニ三間ノ茅屋ヲ
ムスヒテ、一夏ヲ過シ侍リヌ、又甲斐国トクサ山ニ薙リ久
シキ僧アリト聞シカハ、カノムロニモ尋子マカリテ、シハシ
アリテ、又常陸ノ国へ歸リ侍リシ、其後猶カナタコナタヘ
智識編参シ侍リシ云々

常照寺 茨城郡古宿村

佛日山

江林寺

茨城郡常葉村
京都妙心寺末

除地六石三年九升二合

最上山ト号スモト水戸桜町高尾坂ノ辺ニアリ、古國初元和
五年水戸威公、東照宮遺意ヲ奉シテ、始テ水戸城ニ入ル
麾下ニ岡崎綱往ト云者アリ、當家ノ世臣也、公ニ從テ府ニ

到ル、寛永四年綱住威公ニ請テ、香花ノ地ヲ賜ハラシ事
ヲ申ス、公コレヲ許シ、一區地ヲ賜テ、即櫻所ノ地當
時木所ト稱ス綱住喜ニ
堪ハス、佛寺ヲ立テ、自開基ノ大檀度トナリ、少林禪師ヲ
請テ、潤山始祖トス

瑞雲寺 麻島郡林村

除地

大林山下号ス、潤山拙堂朴和尚ハ京妙心寺二世授翁禪
師ノ法子ナリ、応永十八年遷化ス、寺室中将姫織所ノ親

迦像一軸、親鸞上人ノ画ナル所ノ麻島大神宮ノ影アリ

福泉寺 麻島郡大藏村

除地

大藏山下号ス

香積寺 茨城郡下渡村

除地十二石三斗六升一合 當高二十四石七
斗四升八合

大満山明鏡院ト号ス、鐘銘云、常陸州茨城郡且理邑大満

山香積禪寺寺誌散逸創建無所徵文和元年溪翁禪
師開闢寺基禪師不知何許人又不知何嗣義永祿元
龜岡江戸但馬守忠道歸依以為香火地尔後兵燹摧殿堂
庸僧蠹常住鞠將為荒墟元祿十年賢邦君源義公使
吾師潭月與其大庵潭月悉竭衣孟之資自就上木之勞
久而又復旧觀下アリコノ鐘享保六年現住雪岑碩蓮
カ鑄ル所ナリ木尊ハ大満虚空藏ナリ傳稱シテ運慶
ノ作トス達ノ像一軀アリ因君義公ノ寄附スル所ナリ
ウラニ銘アリ文云予偶得上師南光彫喜提達磨大師像

一軀粗及破壞新加修飾寄附常州茨城郡常葉郡渡香
積禪寺現住潭月和尙以安佛坐之側云元祿癸酉之年源
光圓印トアリ境内ニ鎮守ノ小祠アリ三神ヲ一社ニシタ
リ其銘口ノ銘ニ香積寺鎮守公三四字天文十年正月日正
集寄進トアリ

旗櫻寺

久慈郡瑞竜村
正宗寺末

除地八斗五升三合

白雲山
大綱山下号〇寺記云康平五年壬子源頼義父子東征歸

陣之日、立旗竿於此地、示不再用、側栽櫻樹、号退散木、有凱
旗之悦、故称此地曰旗野、建寺曰東光寺、後歷三百年、寺宇既廢、
康安中佐竹義篤、於其故基、重建一寺、曰大沢山瑞竜院、請月寺
以樞禪師為開山祖、正保元年水戸威公於古櫻樹下、又立梵宇、
号白雲山旌櫻寺、令瑞竜院僧春巖住之、於是其故院廢。

祥雲寺

茨城郡上古内村

象田禪師當寺、住スル時、義堂和尚ノ贈ルル詩アリ、光

明寺ノ所ニ載タリ、

天祐寺

茨城郡又熊村

正宗寺旧記云、天祐寺者開山月山和尚、
浄喜御代ニ立也云々、浄喜ハ佐竹右馬頭義篤ノ法名也、
爪連ニアリ、今ハ崇福寺ノ抱ナリ

玉泉寺

那珂郡小田野村
正宗寺末

除地一石九斗三升三合

靈龍山下号ス

金光寺

那珂郡福田村
正宗寺末

除地八石九斗九升三合

浄
静安寺

飯田新田
同郡戸崎村

除地十八石三斗二合

正宗寺旧記云、静安寺者、文和元年建、開山佛国浄喜御

代ニ立也云々、浄喜ハ佐竹右馬頭義篤ノ法名ナリ

弘願寺

同郡大賀村
正宗寺末

除地十六石五斗八升五合

帝青山下号ス

松吟寺

同郡部曲村
正宗寺末

除地二石

稻荷山下号ス、ノ境内ニ天満宮アリ、今ノ神体ハ西像

ニテ、コノ村ノ城主佐竹四郎義元ノ寄附スル所也、裏書

二佐竹四郎義元花押天文七年戊戌六月一日トアリ其
傍ニ住庵義松叟昌忠花押アリ又其傍ニ前任禪真ト

傳灯院

同郡小湊村
正宗寺末

除地六石一斗七合

月溪山ト号ス

玉簾寺

久慈郡東河内上村

雨夜伽云東河内上玉簾寺ト云寺アリ松ノ葉越ニ二重ノ
塔一二里前ヨリ見ユル此土地ハ入四間月山ノ繞キ也
表門ニ往還ヨリ少上ニ見ユル寺中ニ至テ見レハ客殿
ノ前大山ノ裾ノ巖石ヲ用テスクニ庭トセリ少モ手入
テ久誠ニ自然ノ庭ノ如クナリ庭通ニ其奥ニ入テ谷ヲ
越向ニ高廿五丈程幅四五間ノ滝アリ巖石ノ間ヨリ落
ル水巖ニ散テ白布ヲ引如シ則此滝ノ先君義公玉簾ノ
滝ト名付玉ス依テ寺号玉簾寺ト云

入、数年ノ後、ノ地ニ再興スト云、相傳ノ親鸞嘗テ段浦
ニテ、海中ヨリ弥陀像ヲ得テ、七日説法セシト云、如来寺
ノ建タルハ、蓋其地也、貴品記
出ス 灵宝ニ六字名号アリ、親鸞
ノ筆ニテ、大師様也、十字名号ニ幅アリ、一ハ親鸞八十歳
ノ筆ニテ、左右ニ善導法然ノ影アリ、一ハ覚如ノ筆、聖徳
太子影ハ、親鸞ノ筆、千幅名号ハ、法然ノ筆、十ノ内佛ハ、惠
心ノ作、太子木像ハ、春日作ナリ

唯信寺 茨城郡兵戸太田町 除地 東派

願入寺 麻島郡磯濱村 東本願寺連枝寺務

磐船山下称ス

西念寺 茨城郡稻田村 朱印地三十石 東本願寺掛所

稻田山下称ス、本尊弥陀惠心ノ作ト云、親鸞遺跡記云、當

越後ノ寺ノト書ス

寺ハ鷲聖人十年ノ間栖避ノ地ナリコノ地ノ士人福田
九郎頼重ト云モノ聖人ニ帰依シテ剃頭染衣ノ人トナ
リ俗名ヲ更ノス頼重房ト称ス聖人帰洛ノ後禅房ヲ彼
ニ占メコレヨリ嗣子相統シ享保ニ至テ二十七世ヲ經
タリト云親鷲傳繪云聖人越後国ヨリ常陸国ニ越テ並
間郡稻田郷ト云処ニ隐居シタマフ幽栖ヲ占トイヘト
モ道俗弘ヲタツ子蓬戸ヲ閉トイヘトモ貴賤衢ニ溢レ
佛法弘通ノ本懐ヲニ成就シ衆生利益ノ宿念タチマ
子ニ満足スコノ時聖人才ホセラレテ曰ク救世菩薩ノ

告命ヲウケシ古ノ夢已ニ今ト符合セリト云々境内ニ
一ツノ井アリ水清冷ナリ傳稱ス麻島大明神聖人ノ徳
ニ帰依シタマヒ太古ノ俗体ヲ現シテ法号ヲ受ケ給フ
然ルニ福田ノ區上ハ水濁リテ聖人コレヲ患ルニ依テ
明神鹿島七井ノ一ヲ以テ寄附シタマフニ一夜ニ庭前
ニ湧泉セルノ井トリト云明神又神殿ノ錦帳ヲ聖人ニ
寄セラル今ニ至テ當寺ノ什物トリト云遺跡記蓋コレ
親鷲鹿島神主信親ト計テナス所虚蒙ノ説論ニタラス
又井ノ傍ニ御杖杉ト云アリ寺家ノ説ニ云コレ聖人越

ツク、奥州館ニシテ、多ク門下ヲ廣ム。光泉寺其一也。其子
弘願ハ唯秀房ト云。中将君ト称ス。越後カシ原ニテ多ク
門下ヲ廣ム。息光寺其一也。其唯法幼名光養也。中納言公
ト称ス。次ハ其弟子唯念ツク。中将公ト称ス。其子唯願中
納言公ト称ス。下總ニ於テ門下ヲ廣ム。西光寺其一也。其
子唯心中將君ト称ス。次ハ弟子唯生ツク。中納言公ト称
ス。其子唯善。中将公ト称ス。其弟唯願。中納言公ト称ス。次
ニ弟子唯性ツク。中納言公ト称ス。其子淨念。其子空了。其
子唯空。少名松音丸。中将公ト称ス。唯佛ヨリ以來十四世

ナリ。コノ時城主江戸重通佐竹氏ノ為ニ滅セラレ。佐竹
氏水戸城ニ移ル。然レトモ幸ニ佐竹氏亦當寺ヲ信シテ。
尚寺地ヲ轉セズ。久慈郡磯部村ノ内、二十貫ノ地ヲ佛供
料ニ寄付セラル。然ルニ文祿元年八月城中ニテ、失財ノ
事アリシニ、唯空不義ノ雜悦ヲ得タリケレハ、佐竹ノ臣
根本中川ノ二人、唯空ヲ磯辺村ニ於テ拷問ス。唯空罪十
キ由ヲ陳スルニ用ヒラレス。鍋ヲ燒テ唯空ニ被ラシム
ルニ自如トシテ、恙ナカリケレハ、是ニテ疑ヲ晴サレテ、
難ヲ免カレタリ。コノ時惠心ノカ、レタル木尊ノ弥陀

不思議ノ現シテ唯空ノ難ニ代ルト云コレニ依テ唯
空ヲ世ニ鍋被上人ト異名セリコノ時水戸城ヲ修築シ
寺地郭内トナルニ依テ常磐ノ地ニ移サレ今ノ淨光寺
郭ハ即其旧地ナリイマク郭内ニアリシ時佐竹義宣ノ
乳母ニ染ト云シ女當寺ノ本尊ヲ信仰シ境内ニ草庵ヲ
結ビ住ス時人是ヲ佐竹堂ト称セリコノ女九十歳ニ
シテ往生ス慶長年中常盤ヨリ今ノ地ニ移サレ慶安元
年十二月十八日寺領十石ノ米印ヲ賜フ旧記灵宝数多
アリ本尊ハ佐竹義重ノ内室安置ノ佛也准如ノ裏書アリ

リ鍋被本尊ハ惠心ノ筆ナリ聖徳太子五歳像ハ御自作
ト傳称ス親鸞自作之像ハ自照鸞鏡ト称ス又ハ無垢御
影ト云同繪像アリ裏書ニ常陸国總道場常住物ナリ總
坊主可安置者也トアリテ實如ノ判アリ其余親鸞ノ筆
スル所五品アリ金泥九字名号十當祖教行信證黒筆十
字名号名鉢不離名号コレナリ十字名号ヲ契諾付属
名号ト云直ニ唯佛ニ与ル品ナルコトナリ不離名号ト
イヘルハ中ハ本尊左ニ九字ノ名号右ニ六字ノ名号アリ
傳繪四卷アリ本宗ニ於テ日本三部ト称スルノ一也

文ハ覚如ノ筆繪ハ淨賀法眼ナリ、興ニ光養九十四才親
弘願云々ノ三十字アリ、弘願及光養九ハ皆當寺ノ歴代
ナリ、事前ニ出タリ、正信偈文帖外、御文ト称セルモノ共ニ
蓮如ノ筆ナリ、三帖目、御文ト云ハ、実如ノ筆、六字名号ハ
頭如筆ナリ、外ニ唯佛系圖並光明皇后ノ神筆アリ

光明寺

真壁郡下妻小島
東浜

朱印地五石

栗山高月院ト号ス、開祖ヲ明空ト云、開東六老僧ノ第二也

明空俗姓ハ三浦氏ニシテ、武士ナリ、和田義盛滅亡ノ時浪
々シ、始テ出塵ノ志アリ

長福寺

真壁郡宮後村

朱印地五石二斗余

西光寺

同郡築地村

朱印地五石五斗余

淨業寺

茨城郡平村

朱印地五石

淨安寺

同郡同村

朱印地三石

光明寺

同村

朱印地三石

河内守源寺三入レ

廢寺

興禪寺

多珂郡手綱村竜子山

長松山下号ス佐竹家譜云上總介貞義文和元年九月十日遠行号興禪寺殿道号昆山法名道源興禪寺ハ竜孤山ニアリ山号ハ長松山ト云無依和尚開山也又云上總介道源者十九歳ニテ道心起シテ多珂庄竜孤山興禪寺被立云々按ニ道源ノ十九歳タルハ嘉元三年ナリ是年父行義卒ス盖コノ故ヲ以テ道心ヲ發スル也

三宗寺 空華 所藏本

集ニ義堂和尚ヨリ哲侍者ト云僧ノ興禪寺ニ赴クヲ送
ルノ詩アリ、翻穿紙襖去隨縁海、風高落木天、好把長松
枝作拂、中興唱起祖師禪、コノ長松枝ノ句ハ山号ニ依テ
成タル也、又淨智牧書記乃常州長松山ニ歸ルヲ送ト云詩
アリ、參得空山文字禪、就人更覓送行篇、蘇州有世常州有、
月在長松恰々圓、空華集當寺早ク廢潰ス、二百年來ノ事ニ
ハアラサルナリ

西野内曹洞徳泉
寺アリ今下ノ宮ニテリ

徳泉寺

那珂郡岩崎村

本尊弥勒如来佐竹氏ノ時建立寺領三貫五百文也 正宗寺所
藏 今廢ス

福巖寺

久慈郡箕村

本尊觀音佐竹氏ノ時建立寺領三十五貫文ナリ 正宗寺所 今

廢ス

妙法寺

同郡大方村

佐竹氏ノ時建立寺領百餘貫文ト云

正宗寺

所藏 今廢ス

聖泉寺

那珂郡大賀村

佐竹氏ノ時建立

正宗寺

所藏 今廢ス

布金庵

久慈郡宮河内村
増井正宗寺末

鎌倉將軍ノ時ニ増井正宗寺達悟和尚ノ閑山也コレニ
依テ正宗寺ヨリ管スルナリ然ルニ山入乱ニテ佐竹義
舜浪々セラルニ依テ國中孫乱之間漸ク正宗寺ヲ離
レタリシカ山入氏滅亡シテ義舜位ニ復スル後再ニ正
宗寺ニ附ラシ熊野權現ヲ鎮守トス寺領ハ久慈郡塩原
村ニテ三十五貫文ト云リ正宗寺日記云三谷河内ノ布
金庵還慶義舜御寄進本ニ寺領ナリ兩御取合ニ中比達
失御洞多御静謐之上正宗寺へ被附ナリ布金ハ閑山達悟

和尚増井ノ末寺也。布金鎮守熊野大同元年ニ被立ナリ。昔者金砂別當職ノ増井ハ自ニ階堂殿寄附也。建治年中ナリ。又金砂之文書ハ増井ノ前任前南禪達悟益和尚。嵯峨ハ御登ノ時被持。嵯峨炎上之時燒失。三谷河内ニ御影講ト云アリ。二階堂殿ノ御影ノ事ナリ。又云塩原方三十五貫布金ハ所務ナリ云々。按ニ二階堂氏ハ加志村ニ居住シテ小倉村已下近郷ノ知行ス。加志村氏ノ祖ナリ。事ハ氏族門ニ詳ナリ。布金庵今廢ス。

龍澤庵

久慈郡国安村

佐竹氏ノ時建立

正宗寺所藏

今廢ス

修驗

密藏院

久慈郡長谷村
本山派

朱印地合六十五石

大先達ナリ。觀音ノ別當ナリ。近世大宮明神別當ノ兼メ或ハ長谷寺ト稱ス。モト清僧コソ寺ニ居ル。

明應¹
妙王院 茨城郡栗崎村

二階堂大先達ト称スモト清僧コノ院ニ居ル中世佐竹ノ支族戸村八郎義和カ末子宥内住持ト成テ肉食妻帯シテ修驗者トナルコレヨリ子孫相統シテ代々年行事ヲ勤ム宥覺ノ代ニ至テ貞享元年十二月七日水戸義公聖護院道尊法親王ニ請テ鎌倉將軍ノ時ノ鎌倉二階堂ノ大先達ニ准擬セラレテ宥学ヲ大先達ニ補セラレ

二階堂ト称ス是ヨリ日本大先達二十八人ノ一員トナル年行事大光院伍智院八大坊ヲ始トシテ新治一郡行方一郡那珂郡五十八ヶ村野州武茂組ノ山伏ノ支配ヲ命セラル又入四間権現ノ別當ヲ兼テ其子宥秀父ニ統テ大先達タリ子孫今ニ至テ其職ヲ世々ニス

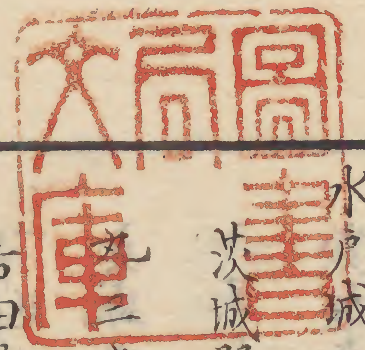
戸村氏譜

新編常陸國誌卷之三十四
水戸城
茨城郡常葉村ノ東ニアリ、蓋古ノ那珂郡ノ地ニシテ、二
九以西ノ外郭ハ、大概常盤郷神生村ニ屬シ、本城ハ
吉田郷浮村ノ地ナリ、神生浮ハ、共ニ古ノ地名ナリ、今ノ
地名ニテハ、常葉濱田兩村ノ間ト
云ハキナリ、神生浮
等ノ事別卷ニ注ス、東西十里余、南北二三里許、但六町
一里前
ニ仙波湖ヲ襟トシ、後ニ那珂河ヲ帶フ、中古大掾家コ

新編常陸國誌卷之三十四

隅東柳洲 中山信名平四 修

故城一



水戸城
茨城郡常葉村ノ東ニアリ、蓋古ノ那珂郡ノ地ニシテ、二
九以西ノ外郭ハ、大概常盤郷神生村ニ屬シ、本城ハ
吉田郷浮村ノ地ナリ、神生浮ハ、共ニ古ノ地名ナリ、今ノ
地名ニテハ、常葉濱田兩村ノ間ト
云ハキナリ、神生浮
等ノ事別卷ニ注ス、東西十里余、南北二三里許、但六町
一里前
ニ仙波湖ヲ襟トシ、後ニ那珂河ヲ帶フ、中古大掾家コ

築ク然レトモ時代詳ナラス、蓋録倉將軍ノ世ニ當テ築
ク所ナリ、或ハ曰ク馬場大掾平資幹ヲ築ク所ナリ、谷田部本
大掾系圖 資幹ハ常陸大掾国香八世ノ孫ナリ、国香ノ子
一説 真盛世ニ所謂ル平將軍ナリ、真盛姪維幹ヲ子トシ、本国
ニアル所ノ田園ヲ附与ス、維幹苗ヲ筑波郡多氣邑ニ居
ル、五位ニ叙セラレテ、多氣大夫ト称ス、其子為幹々々ノ
子重幹、皆多氣館ニ住ス、世々當国ニアルヲ以テ、勢威国
ニ被リ、富国内ニ冠タリ、諸郡ノ郡領ノ職ヲ買得シテ、其
任ヲ世々ニシ以テ、子孫ノ世職トス、筑波郡及南郡北郡

吉田行方麻島小栗下妻東條真僻并下総国豊田等ノ地、
大概其管スル所ナリ、重幹四子アリ、長ハ致幹、常陸權介
トナル、依テ多氣權守ト称ス、家ヲ継テ多氣館ニ居リ、筑
波郡真僻東條下妻南郡北郡等ヲ管ス、是ヲ家嫡トス、次
ノ清幹ト云、吉田行方麻島等ノ地ヲ管シテ、吉田館ニ居
ル、依テ吉田次郎ト称ス、即馬場資幹ノ曾祖ナリ、次ハ政
幹ト云、豊田ノ地ヲ管シテ、下総国石毛館ニ居ル、依テ石
毛荒四郎ト称ス、豊田氏ノ祖ナリ、次ハ重家ト云、小栗地
ヲ管シテ、八田館ニ居ル、コレヲ小栗五郎ト称ス、小栗氏

ノ祖ナリ致幹ノ子直幹其子義幹共ニ多氣ノ太郎ト称
シテ多氣館ニ住スコレ常陸平氏ノ惣領ナリ源頼朝勃
興スルニ及テ出テ帰ス依テ幕府ノ家人ニ列シ大名ノ
員ニ加ハル○以上參取尊卑系脈大掾傳記同系圖東鑑等
故城ノ條ニ詳ナリ依テ國香以下義幹以上ノ事然ハ筑波郡多氣
爰ニハ其大綱ヲ挙ケリ吉田清幹三男一女アリ長ハ盛
幹吉田郡ヲ管シテ吉田太郎ト称ス次ハ忠幹行方郡ヲ
管シテ行方平四郎ト称ス行方諸氏ノ祖ナリ次ハ成幹
鹿島郡ヲ管シテ鹿島館ニ居ル麻島三郎ト称ス麻島諸
氏ノ祖ナリ傳記女ハ源義業ニ嫁シテ佐竹昌義ヲ生メ

リ系圖分脈盛幹ニ子アリ長ハ幹晴○按ニ一本幹清
佐竹系圖田太郎ト称ス子孫或ハ大戸ト称ス矢田部猫崎前田上
野平須白方多良崎勝倉市毛武田堀口新平道理山藤佐
女等ノ祖ナリ次ハ家幹石河次郎ト称ス傳記系圖源頼
朝勃興ノ日一門ト共ニ行テ帰ス文治元年三月吉田社
ノ祝大舍人貞恒ノ乞ニ依テ吉田郡恒富郷信田尻谷地
ヲ吉田社ニ寄附ス系圖家幹十男三女アリ長ハ幹明谷
田太郎ト称ス平戸河原島田ノ祖ナリ次ハ資幹○按ニ
川系圖同旧記助幹ニ作ル今東鑑藥馬場次郎ト称ス又
玉院所藏系圖惣社文書等ニ從フ

小次郎ト云、○小次郎ハ東次ハ秀幹三郎ト称ス其其化
シテ現人神トナル、祠ヲ吉田所々ニ立コレヲ祭ル三郎
天神ト称ス子孫トシ次ハ国幹常葉四郎ト称ス常葉卿
ノ地頭トナル久米常葉上阿久津下阿久津神生宮下等
ノ祖トリ次三人ハ女トリ一ツ男殿ト称ス二ツフ、リ
殿ト称ス三ツ大串ト云大串ノ地ヲ傳領スルヲ以テナ
リ次ハ武幹山本五郎ト称ス山本ノ地頭トナル吉田郷
ノ本主ニテ山本ノ祖トリ、○石川旧記四男ヲ山本トシ
王院藏系、次ハ高幹恒富六郎ト称ス又石河ト称ス吉田
園ニ從ノ

恒富兩郷ノ地頭トナル恒富ノ祖トリ次ハ石川七郎ト
称ス聖道ト成テ禪師彦ト云石崎ノ地頭トナル石崎一
家ノ祖ニテ長須深佐久原大川戸方波見鷲塚等皆此後
トリ次ハ光幹大野八郎ト称ス大野郷ノ地頭トナル大
野大泉小泉前野蛭所田谷橋白根幡山等ノ祖トリ次ハ
宗幹石川九郎ト称ス栗崎郷ノ地頭トナル兄高幹ノ子
ニ准ス、○宗幹ノ子ニ准スルハ、栗崎ノ祖トリ海道大窪
ノ石川ニ是ヨリ出タリ、○按ニ石河旧記ニハ宗幹ヲ大
次ハ望幹山本十郎ト称ス兄武幹ノ養子トナリ吉田山

本西郷ノ地頭トナル山本ノ祖ナリ傳記崇王院所藏傳
王院藏系圖○按ニ爰ニ載タル十人ノ名諱淺羽本系圖
及谷田部本系圖一説等諸説紛々異同少カラス然レ
トモ皆後人ノ杜撰ニ出テ古記ノ資幹吉田郷馬場ノ地
載スル所ニアラス故ニトラス
○按ニ谷田部本系圖一
ニ住スルヲ以テ稱ス傳記推考
説ニ南郡小河村ナル馬
場ヲ以テ其所トスルハ甚非ナリコトニ云ハル馬場ノ
地ハ吉田郷ノ辺タルコト必セリ今考ルニ吉田村ニ馬
場ト稱セル地ニ所アリ一ハ葉王院ノ辺ニ在テ二五馬
場ト稱ス一ハ野木明神ノ辺ニ在テ野木馬場ト稱ス兩
所ノ内何レヲ以テ其所ト定メ難シ又按ニ水戸ノ本城
ハ古吉田郷ノ内ニテ其地ヲ浮村ト云吉田ノ末社七社
ノ内水戸明神ノアリシ所ナリ多ハ宮社ノ傍ニハ馬場
ト稱セル地アリ然レハ水戸社ニモ馬場アリシナルハ
資幹水戸ノ社邊馬場ノ地ニ住シテ始テ馬場ト稱セ
シモ亦知ヘカラスサテ此地ハ即水戸ノ本城ナレバ資

幹始テ水戸城ヲ築ケリト云説アルモ由縁ナシトス
カラス然レトモミナツマヒラガニスヘカラス
初父ト共ニ頼朝ニ歸シ戸田野郷ノ地頭トナル石河建
久元年冬頼朝上洛ノ時先陣ノ隨兵ニ列ス二年二月頼
朝伊豆箱根ニ所參詣ノ時又先陣ノ隨兵トナル四年六
月多氣義幹罪有テ所領筑波郡及南郡北郡等ノ地ヲ収
公セラル即日其地ヲ資幹ニ賜フ同族タルヲ以テナリ
是ヨリ資幹一家ノ惣領トナリ大名ノ列ニ加ル東鑑是
ヨリ先麻島神宮造替ノ年期タルヲ以テ伊佐為宗小栗
重成等ヲ造營奉行トシテ造替セシムルノ処ニ事遅引

及、利重成狂疾ノ發シ、其事ニ堪サルニ依テ、同七月
資幹ニ命シテ、造宮ノ行事トス、終ニ其功ヲ遂ク、同九月
義幹ノ所領殘ル所、重テ資幹ニ賜フ、六年三月南部東大
寺供養アルニ依テ、頼朝上洛アリ、京師ニ入リ、及テ先石
清水宮ニ詣ス、時ニ資幹御後ノ隨兵ニ列ス、鑑尋テ常陸
大掾^根ニ任ス、世ニ馬場大掾ト称ス、馬場大掾ノ号ヨリ、ニ
始^{傳記}、系圖、建保二年九月、公家ヨリ命セラレテ、當国ノ在
廳トナル、仍テ鎌倉ヨリモ、當国府中ノ地頭ノ事ニ於テ
ハ、ハテ資幹ノ進止タルヘキ由ヲ仰ス、東^是ヨリ子孫

府中石里城

相兼テ大掾ニ任シテ、世々在廳タリ、其身武家トシテ、公
家ノ職務ヲ攝スルヲ以テ、世ニ公家武家兼帶衆ト称ス、
惣社^{支書}、資幹在廳ト成ニ及テ、居館ヲ府中ニ構ヘ、在職ノ間
ハ、彼地ニ在テ、府務ヲ行ス、<sup>参取石川文書、税所文書、惣社
薬王院文書、等</sup>
石岡城コレナリ、^{税所}文書、是時ニ當テ、當国ノ門族分レテ七
黨ト成ル、一ハ国府ト云コレ、資幹ノ近親南北ニ郡ノ族
ヲ云、ニニ行方コレ、行方郡ノ支流ニテ、行方忠幹ノ後、其
中小高島崎麻生玉造ノ四氏ヲ以テ、行方四頭ト称ス、三
ニ真壁コレ、多氣義幹ノ弟真壁六郎長幹ノ流ナリ、四ニ

小栗コレ小栗重家ノ後ナリ、五ニ吉田コレ吉田盛幹ノ
子孫ナリ、其中吉田石河馬場ノ以テ、吉田三頭ト称ス、六
ハ東條コレ多氣義幹ノ弟東條五郎忠幹ノ流ナリ、七八
麻島コレ麻島成幹ノ後ナリ、其中麻島中居畑田等ノ六
家ヲ六頭ト云、コレヲスヘテ平氏七郡地頭ト称ス、コノ
諸流ヨリ、大掾ヲサシテ、大惣領ト云、凡コノ七黨出軍ノ
時各一隊トナル、又年々相替テ、麻島ノ大使役ヲ勤ム、其
由縁ハ麻島神宮毎年七月十日十一日ノ祭會ハ年中數
十ヶ度ノ祭事ノ内殊ニ大嘗ノ祭タルニ依テ、往古ハ勅

使下向シテ其事ニ預リシニ、中世公私費多ク、国煩ヒ民
歎クノ間、勅使ノ下向ヲ止メ、大掾ヲ以テコレニ代テ、勅
使ニ准テ衣冠ヲ着シ、四方奥ニ乘リ、神宮在廳等ノ座ニ
列シ、祭事ヲ勤仕ス、コレヲ大使役ト云、又小使役アリ、コ
レ目タル者ノ所役ナリ、資幹ノ大祖国香大掾タルノ時
コノ役ニ從テ、尔後子孫ノ内大掾タル者ハコレヲ役ス、
頼朝霸業成ニ及テ、資幹大掾ニ任シ、其官ヲ世々ニスル
コトノ許サレテヨリ、大掾ヲ始メ、其門族七郡ノ地頭等
七ヶ年ニ一度巡役トシテコレヲ勤ム、然レトモ支流ノ

輩ハ大掾ノ官ニ任セサルヲ以テ祭使勤仕ノ間ハ更ニ
大掾ニ准擬シ假ニ大掾ト称ス小高泰幹陳狀麻島大天
使役記傳記稅所文書
心中ニ至ルマテ退轉トシ大官司文書
麻島 領書資幹七男アリ長
ハ朝幹馬場太郎ト称ス又横倉ト称ス次ハ某馬場次郎
ト称ス又青柳ト称ス次ハ某袴塚三郎ト称ス次ハ某箕
川四郎ト称ス次ハ某吉治五郎ト称ス○一説ニ
枝川ト称ス次ハ直
幹河崎六郎ト称ス○直幹ノ名諱兼
王院所藏系圖ニ云ル次ハ某枝河七郎ト
称ス傳記系圖○或ハ吉治七郎ニ作ル○按ニ谷田部本
系圖一説悉クコノ兄弟名諱ヲノス然レトモ皆後
人ノ杜撰ニ出タリ資幹没スルニ及テ朝幹弟次郎ト嫡
故コトラス

庶ノ論ス吉田一族ノ中大野勝倉等次郎ニ黨シテ專ラ
コノ事ヲ執ス其外吉田一家ノ輩両方ニ分レテ確執シ
遂ニ鎌倉ニ訴フ然レトモ朝幹利ヲ得テ家ヲ継テ大掾
ニ任ス爰ニ於テ一門ノ中朝幹ニ忠節セシ者ニハ本領
ノ上ニ又所領ヲ加ヘテ次郎及大野勝倉以下ハ黨ノ
人數モ先非テ悔テ歎訴ノ輩ニハ本領ヲ返与テ仍テ吉
田ノ家子ノ中ニ本主方恩賞方ノ二方アリ本主方トハ
忠節ノ人數ノ流シ云本ヨリ退轉トキ領主タレハナリ
恩賞方ハ次郎与黨ノ流シ云一度所領ヲ離レ恩免ヲ得

テ本領ニ安堵スレハナリ家子トハ一家ノ子弟ニテ一
族ヲ云モト一族ノ流トイヘトモ名字ノ地ニ居ラスシ
テ惣領ノ扶助ヲ受ル者ハ家人ト称シテ家子ト云コト
ヲ得スト云傳記朝幹大掾ニ任シテ後亦府中ニ在テ府務
ヲ行ハ安貞二年十二月是ヨリ先小田知重時ノ国司ニ
属テ大掾ノ職ニ居ランコトヲ競望ス朝幹安ニヒス即
鎌倉ニ訴テ云ク是職ハコレ始祖相承ノ上父資朝故大
將殿ノ下父ヲ帯シテ其ニ相傳スル所ナリ然ルニ知重
国司ニ属シテ新儀ノ企ヲ構ヘ非分ノ望ヲ致ス早夕制

止ヲ加ハ賜フヘシト申ス是ニ至テ鎌倉ヨリ知重ヲ詰
ス知重弁スルコト能ハス事遂ニヤハ惣社
父書朝幹ノ子姪
分レテ横倉八辻川和田宇木石崎菅蒲井中等ノ諸氏ト
ナリスヘテ資朝朝幹ノ支流コレヲ馬場一族ト称スコ
ノ一族七部地頭ノ内吉田ノ部ニ列スト云ヘトモ資幹
ノ近親タルヲ以テ麻島大使役ニ至テハ国府ノ分ヲ役
スト云傳記朝幹没シテ男教幹繼テ大掾トナル系正志ニ
年二月六日卒ス年六十八谷田部本男光幹ツク光幹没
シテ時幹ツク系國惣社父書ニ大掾ニ即任幹アリ時代
ヲ推テコレヲ考ルニ蓋時幹ノ弟ナリ

世々大掾ニ任シ、多クハ府中ニアルヲ以テ、世ニ国府大
掾ト称ス、大使役記又府中大掾ト称ス、時幹法名ハ淨喜、
鎌倉大草帛、古老傳説
没シテ男盛幹ツク、法名淨壽、没シテ子ナシ、弟高幹ツク、
系圖石河、初十郎ト称ス、家ヲ継テ大掾トナル、稅所高幹
新編系圖
ノ時ニ當テ、鎌倉ノ執權北條高時ノ一門朝憲ニ違テ、悉
ク誅ニ伏ス、建武二年七月、高時ノ遺子時行、餘黨ヲ集テ
恢復ヲ計ル、高幹旧好ヲ思テ、門族ヲ卒テコレニ応ス、伊
豆駿河武藏相摸甲斐信濃ノ勢ト同シク、時行ニ從テ、鎌
倉ヲ攻ム、其勢甚疾シ、鎌倉ノ執權足利直義將軍、成良親

王ヲ奉シ、嘗テ奔テ逃ル、時行代テ鎌倉ニ入ル、同八月朝
廷足利尊氏ニ勅シテ、時行ヲ討シム、尊氏進テ三州矢別
ニ至ル、時行命シテ名越式部大輔ヲ大将トシ、コレヲ道
ニ遮テシム、高幹等從テ、佐夜中山ヲ越ユルニ及テ、尊氏
ノ兵ト血戦三十余度、利ナシ退テ中山ニ保ス、官軍來攻
ルコト甚急ナリ、高幹等諏訪三浦等ノ兵ト同シク防戦
日ヲ終テ、太平記毛利家、既ニシテ高幹旗小栗重貞名
諱ハ系圖及長、忽ニ心變シ、名越ヲ斬テ、官軍ニ降ル、是ニ
於テ平軍守ルコト能ハス、退テ箱根水飲峠ニ保ス、兵大

ニ潰ルヲ以テ又退テ相換川ヲ越テ川ヲ前ニシテ防カ
ントス高幹ハ手負ヲ助ケ馬足ヲ休メ且散卒ヲ集ンカ
為ニ川面ニ楯ヲ突並ヘサセ堅固ニコトシ守ル尊氏ノ
先隊佐々木道譽馬ヲ降シ流ヲ截テ渡ラントス其兵新
屋三郎先登ス高幹中流ニ進テ是ヲ防キ矢石ヲ登スル
コト雨ノ如シ三郎矢ニ充テ斃ル然レトモ道譽屈セス
自劔ヲ奮テ兵二人ヲ水中ニ斬テ遂ニ進テ川ヲ渡ス官
軍機ニ乘テ悉ク進渡ル高幹等防クコトヲ得ス兵ヲ引
テ録倉ニ退ク官兵相次テ来リ攻ム平軍皆討レ或ハ自

殺シ或ハ遁逃ス乱平クニ及テ高幹等出テ尊氏ニ降ル
太平記 尋テ入道シテ大掾入道ト称ス法名淨永ト云 税
文書石川文書 尊氏朝命ニ背クニ及テ猶コレニ忘スコ
ノ時ニ當テ當國中分シテ二トナル小田関下妻等ノ門
族皇師ヲ引トメ佐竹大掾ノ徒尊氏ニ忘ス延元三年北
曆志 七月小田志筑ノ官軍来リ攻ム時ニ淨永石岡城ニ
アリ税所虎鬼丸以下ノ一門家人ヲシテコレヲ防カシ
ム市川舟橋ノ辺ニ於テ終日相戦フ小田等終ニ兵ヲ引
テ歸心 税所 文書 是年吉野ノ朝廷北畠顯信ノ陸奥大介鎮守

大將軍トシ義良親王ヲ奉シテ任国ニ赴カシム父入道
一品親房輔佐トナル共ニ南海ヲ経テ東国ニ入ル路ニ
シテ暴風ニ逢ヒ諸船漂没ス親王及顯信ノ船伊勢ニ帰
着シ親房ノ船當国東條浦ニ至ル國中ノ官軍小田治久
關宗祐下妻伊佐真壁等親房ヲ迎ヘテコレヲ小田城ニ
入テ專皇師ヲ勤ム太平記金勝院本同塙本高幹石岡城
ニ在テコレト抗衛ス與国二年北主曆志尊氏ノ將高師
冬来テ小田城ヲ圍ム師冬別ニ高幹ニ命シテ志筑城ヲ
圍マシム志筑ハ小田ノ支族ノ拠ル所ナリ高幹稅所幹

治等ノ一族ヲ催シ志筑城ヲ圍攻ム同七月城兵出テ戰
ヲ互ニ勝負アリ稅所十一月小田治久師冬ニ降ル親房
走テ關城ニ拠ル師冬ニ行テ圍ム白河志筑ノ城兵治久
降ルヲ聞テ出テ降ル高幹即兵ヲ移シ師冬ニ從テ親
房ヲ圍ム四年北主康秋親房關城ヲ弃テ逃レテ吉野ニ
歸ル大室城ニ没落ス相尋テ伊佐ノ城兵出テ降ル高幹
ノ門族皆勲功アリ稅所關東悉ク武家ノ有トナリ正平
七年北主文二月新田義宗義兵義治義兵ヲ關東ニ奉テ
尊氏ト武藏野ニ戰フ三將ノ師利アラズ義宗退テ笛吹

此ニ叱ス。上野大守宗良親王衆ヲ卒テ来テ義宗ヲ救ス。
尊氏進テコレヲ攻ム。高幹佐竹小田等ト共ニ尊氏ノ先
鋒トナル。義宗師敗レテ逃去ル。太平男詮国大掾ニ任ス。
ルノ後モ、高幹ハ猶府中ニアリ。詮国クシテ水戸館ヲ守
ラシム。葉王院尋テ府務ヲ詮国ニ譲リ、高幹ハ水戸ニ老
ス。正平佐竹氏ト兵ヲ構ス。佐竹ノ師青柳ノ地ニ至ル。高
幹兵ヲ出シテコレヲ遮ル。袈島中務少輔幹行ノ子十
郎太郎先登シ奮戦シテ死ス。佐竹ノ兵退ク。高幹大ニコ
レヲ徳トス。事ヲ具シテ詮国ニ達シ、永ク其功ヲ志レシ

上杉系圖ヲ按ニ上杉
氏憲ノ二男治部少輔
教朝大掾ノ養子ト
ナリタルトアル。滿幹
モ其縁ニテ氏憲ニ
黨セシ歟

ラシム。石川延文六年五月足利義詮詮国ニ命シテ當国
ノ太田父ヲ奉ラシム。詮国弘安二年作ル所ノ作田惣勘
父ヲ写シテコレヲ献ス。太田父書。蓋義詮天下ノ田數ヲ
計ラシトス。故ニコレノ令ヲ下セシナリ。花營三代記丹後
元中ノ始北主至詮国卒ス。葉王院文法名希香道号花峰
ト云。系時ニ男永壽幼稚タルヲ以テ家臣頼国国貞加判
シテ家務ヲ行フ。葉王院父書。○按ニ国貞頼国共ニ姓氏
ニ見。永壽長シテ大掾ニ任シ。名ハ滿幹ト云。系國府中ニ
居ル。鎌倉大應永七年水戸城ヲ修築ス。水戸本城中
満幹

ノ晚年ニ鎌倉ノ公方足利持氏不君ナリ管領上杉氏憲
數諫ム持氏氏憲ヲ疏ス君臣遂ニ隙ノ生ス二十二年五
月氏憲管領職ヲ辞ス持氏上杉憲基ヲ以テコレニ代フ
氏憲密ニ持氏ノ叔父滿隆ヲ勸テ逆ヲ謀ル二十三年八
月計策已ニ定ル氏憲病ヲ称シテ出テス諸国ノ家人ヲ
招キ且滿隆ノ内書ニ氏憲ノ書ヲ副テコレヲ諸国ニ廻
ラシ諸士ヲ催ス甲相総野常與ノ大名諸家黨スル者多
シ滿幹及行方小栗ノ族皆コレニ志ス其余當国ノ諸士
佐竹與義小田治朝等ニ同意セリ只佐竹義人ハ管領憲

賢ノ弟ナルヲ以テ預ラズ鎌倉大草帝湘山
星移集旅宿河谷同十月滿隆
氏憲兵ノ卒テ持氏ヲ襲フ持氏ノ兵敗レテ駿河ニ奔リ
今河範政ニヨリ憲基及佐竹義人越後ニ奔ル滿隆鎌倉
ニ入テ公方ト称シ氏憲ヲ管領トス明年正月今河範政
京都將軍ノ命ヲ奉シテ諸將ノ兵ヲ將テ足柄箱根ヲ越
テ滿隆ヲ攻ム義人越後ヨリ起テ上州ヲ經テ来テ滿隆
ヲ伐シ滿隆師敗レテ防以コト能ハズ氏憲等ト共ニ自
殺ス持氏位ニ復ス大草帝神明院旅宿
河谷喜連川判鑑憲基又管領トシ
テ佐竹義人ハ切ヲ以テ評定ノ頭人トナル判鑑滿幹及佐

山入三味頼田ノ
所領ノ小野崎ノ
領トナリルハコノ
例ナリ

竹與義小栗滿重等皆出テ降ル持氏コレヲ許ス然レト
モ因ヨリ其逆ニ黨スルヲ惡テ各所領ノ地ヲ削リ有功
ノ諸士ニ分与ス滿幹ノ領地水戸ノ邑ヲ削テコレヲ義
人ノ被官江戸但馬守藤原通房ニ賜フ白河文書稅所文
昔畑田文書葉五
院文書判鑑佐竹家士知行目錄等推考○按ニ佐竹與義
小栗滿重等一旦持氏ニ降リ其所領ヲ削ラレ其罪ヲ許
サルトイハトモ後遂ニ善死ヲ得ス滿幹モ亦善死ヲ得サ
ルヲ以テ見レハコノ三士其所領ヲ削ラルヲ以テ持
氏ヲ恨ムコト止事能ハス遂ニ誅ヲ受ルニ至ルナリ依
テ考ルニ江戸氏水戸ヲ領セルモ決シテ私闘ヲ以テ取
ニハアラス持氏ノ命タルコト必セリコノ比マテハ私
闘ニテ人ノ所領ヲ奪フコトハアラス私戦ニテトルコ
トニ成シハ成氏亂後ノ通房ハ水戸ノ近里川和田館ニ
コトナリ故ニ推考ヲ以テ書ス

応永廿年滿幹猶
水戸ノ支配ニシテ
書稅所ニテリ

コノ人數疑フニ

居レリ方今大乱ノ後ニ爲レテ又ハ東國イマ夕
靜ナラス滿幹及子姪等水戸府中ノ間ニ往來シテ敢テ
水戸地ヲ以テ通房ニ与ヘス通房如何トモスヘカラス
陽ニ交會田ノ如クス依テ滿幹意ヤハ解タリ三十三年
○按ニ大掾系岡谷田部本及新編江戸系圖廿九年ニ作
ル今姑ラク武熊社記及宮田氏家説ニヨルニ
六月廿一日滿幹等青屋ノ祭事ヲ役ヒンカ為ニ府中ニ
赴ク通房其間ニ乘レテ廿三日ノ夜密ニ兵ヲ發ス系岡
谷田
部本新編江戸系圖武熊社記那珂氏手簡加倉井彦次郎幸久佐藤豊後守館
越前守春秋尾張守小幡長門守外野伯耆守厚綿縫殿允

信名按滿幹頼
幹ハ水戸ノ主ナリ
カ清幹ヨリ全ク府
中ノ主ナリ故清
幹ハ代ト思ハ成ニ

薦田修理亮等コレニ從テ、谷田部氏手簡其川ノ藥師堂
ニ於テ勢込シ、笠原谷ヲ越テ水戸城ヲ襲テ、城兵周章シ
テ離散ス、通房遂ニ水戸城ヲトル、滿幹等又如何トモス
ル、且ト能ハス、遺黎ヲ保テ府中城ニ居ル、コレヨリ江戸
氏世々水戸ノ城主トナル、系圖新編江戸系圖谷田部氏
滿幹以下大掾ノ事、府中故城ノ水享元年春通房孚綿
下ニシル、ス合考スヘシ
五郎左衛門助義ヲ代官トシテ、水戸ノ邑里ヲ管セシム
兼王院 是ヨリ前佐竹與義、小栗滿重等皆持氏ノ意ニ背
テ打統テ誅ヲ受ク、是年二月大掾滿幹ニ自殺ス、共ニ氏

憲ノ与黨ナリシヲ以テ、事ニ就テ除カレシナリ、大草帝
掾系 爰ニ於テ大掾漸ク衰ヘテ、水戸ヲ復スルコト能ハ
ス、通房晩年入道シテ道勝ト云、和光院年代記同當時佐
竹家ニ於テ小野崎江戸小貫大塚ヲ以テ四大ノ宿老ト
稱ス、戸村本佐此時ニ當テ、關東ノ公方足利成氏、京師ト
合ハス、下總古河城ニ在テ、旧好ノ諸將ヲ催シテ、京師ノ
兵ト戦テ、管領上杉氏ハ京師ノ命ニ從テ、關左ノ諸士ヲ
督責シテ、征伐ヲ勤メシム、然レトモ克コト能ハス、連年
相戦フ、關東大ニ乱ル、道勝ハ佐竹實定ヲ輔ケテ、京師ノ

令ニ忘シ成氏ニ敵ス御内書案実定ハ佐竹義人ノ庶子ナリ
義人コレヲ愛シ嫡義俊ヲ逐テ家ヲ実定ニ譲ル故ニ実
定立テ家督タルコトヲ得タリ戸村本佐竹系圖同正長
宗寺本御内書案
祿三年十一月小田結成長沼真壁等成氏ノ兵ト當国信
太庄ニ戦ス成氏ノ師強クシテ小田結城等ノ兵多ク命
ヲ殞ス道勝ハ実定ニ從テ出軍ス実定戦死セル諸士ノ
姓名ヲ具シテコレヲ京師ニ致ス是ヨリ後所々ニ於テ
相戦フ皆勲功ヲ尽ス御内書案寛正元年四月將軍ヨリ内書
ヲ実定及道勝ニ賜フテ功劳ヲ称ス御内書案二年道勝悲世

慶隆ノ為ニ水戸城ノ傍亀田ノ地ニ一寺ヲ立テ藤福寺
ト云和光院
年代記四年十二月將軍ヨリ重テ内書ヲ実定並道
勝ニ賜リ年来ノ辛勞ヲ称ス然レトモ成氏ノ師弟ヲ追
テ蜂起ス五年將軍朝廷ニ奏シテ錦御旗ヲ賜リ関東ニ
遣シテ諸將ニ令シテ成氏ヲ討シム然レトモ諸士及復
常ナクシテ征スルコト能ハス同八月又内書ヲ実定ニ
賜リ速ニ策ヲ決シテ征伐ヲ遂ヘキ由ヲ命セラレ道勝
ニモ別ニ内書ヲ下サレ実定ヲ諫テ戦勝ノ功ヲ致スハ
キ旨ヲ仰セラレ道勝等意ヲ尽ストイヘトモ関東ノ諸

將成氏ニ通スル者多クシテ志ヲ得ス御内書同六年五月
三日、道勝五十六歳ニシテ卒ス和光院初道勝水戸城ニ
移ルノ時、弟肥前守通常ヲ以テ、武熊ノ別郭ニ居ラシム
コレヲ武熊氏ノ祖トス戸村本系圖古本系圖同谷田部
作ル今谷田部本及武熊家説ニ從フ道勝數子アリ、嫡ハ某修理亮ト称ス
コレヲ川和田城ニ居ラシム妙徳寺棟札二十三歳ニシ
テ先立テ卒ス、故ニ家ヲ嗣ス法名洞勝和光院過去帳谷
田部本○按ニ或
ハ洞勝ヲ東秀ニ作テ諱トス訛ナリ、次ハ通治、隱岐守ト称ス古本戸村本
本通治ヲ洞勝ノ子トス今甲明神藏略本才五ヒ古本ニシタカフ那珂郡鳥子城ニ居

シ、其隣里ノ采邑ヲ与フ谷田部本那次ハ頼通彦次郎
ト称ス古本戸村本谷田部本 文明十七年、岩城氏兵ヲ登シテ佐
竹乱ノ時、太田木崎ニ於テ戦死ス古本谷田部本次ハ通榮、谷
田部本 國誌○按ニ國誌 彦三郎ト称ス古本谷田部本小野崎氏
通ヲ道ニ作ルハ非也 彦三郎ト称ス古本谷田部本小野崎氏
ノ養子ト成テ、額田城ヲ領ス國志谷田部本也 按ニ國志
リ次ハ通弘、戸村本 谷田部本 彦四郎ト称ス古本谷田部本後河内守ト
称ス戸村本那珂郡枝川地ニ居ル、枝川氏ノ祖トシ、戸村本谷
田部本 次ハ祐通彦五郎ト称ス、戸村 洞勝三子ナリ、長ハ通
長、古本戸立テ祖父通房ノ統ヲ受ク、但馬守ト称ス古本谷田

部次ハ通俊、藤五郎ト称ス、後ニ通泰ノ養子トナリ、次ハ
 僧ト成テ禪ヲ学入、氷戸ノ円通寺中興祖トナリ、谷田部
 通長ノ時ニ至テ、關東ノ兵乱尚止マラズ、國中静ナラ
 ス、爰ニ養養河太郎兵衛同太郎三郎兄弟ノ者アリ、大掾氏
 ノ族ナリ、近來佐竹氏ノ威ニ復シテ、通長ノ使令ヲ受ク
 然レトモ宗家ノ顧念シ、密ニ府中ニ通シテ、變ヲナサン
 トス、通長ユレヲ捕テ、渡ノ地ニ於テ誅ス、善代名善代名、字系圖字系圖、天明十天明十
 三年五月五日、小田成治、大掾北條信田、東條真壁、安戸笠
 間ノ兵三千余ヲ率テ、小幡長門守カ、小幡城ヲ攻メ、民舎

ノ焼テ乱妨シ、進テ小幡原ニ至ル、通長兵ヲ出シテ、コシ
 ヲ遮リ相戦ス、成治兵北條ヲ初メ六十餘人討死ス、通雅長
 ノ方ニ至リ、下原又

木城

古老ノ傳説ニ、大掾家江戸家在城ノ時ハ此郭ハカリ
 ニテ、江戸家ノ時ハコレヲ内城ト云、和光院過去帳和光院過去帳、通通
 泰ノ狀、平野氏永録平野氏永録、十年十年、今ノ中御門今ノ中御門ト云ルハ、大手門大手門
 狀等ニ見エ、今ハ本北ト云今ハ本北ト云、今ノ中御門今ノ中御門ト云ルハ、大手門大手門

今ノ橋詰門ハ搦手門ナリト云、中御門ト云ハ淨光寺
郭ト本城ノ間ノ門ナリ
リ、橋詰門ハ二丸ヨリ本丸ニ丸ノ間ノ橋ヲ渡リテ本
丸へ入ル門ナリト云、但江戸家ニ成リテハ明応中ニ今ノ二之丸ヲ外郭ニ
本丸ニシラヘ、コレヲ宿城ト号シテ、諸士及商賈ノ類ヲ置
レシト見ユ、説下ニ、サテコノ宿城ノ二ノ丸トシテ中
城ト号シ、又三之丸ヲ築キシハ、佐竹義宣ノ時ナリ、其
外ノ二郭ハ、今ノ水戸侯ニ至リテ築ク所ナリ、説下ニ、
此本城ノ地ハ、古ハ吉田郷ニ属シテ浮村ノ内ナリ、水
戸ノ士山縣之覽ノ詩序云、水戸府城昔時常陸大掾所

吉田郡ニ入タルト云
車抄ニテ書シ

築也、初地名曰吉田、属那珂郡、今属茨木郡也、吉田末
社六座之内、有水戸明神、其社在郭下、今也、迂于吉田柵
内、盖府名出自此神、美トアリ、コレハ太田ノ覽、卷中ノ
作ナリト云、其比マテハ吉田ノ内ナルコトノ傳説アリ
リシト見ユ、但コノ地、中世吉田郡ト称シナレハ、
其事ヲ傳ヘタルニモアラシトナレト、何レ
ニモ吉田ト云シコトノサテコノ浮村ナリト云ヘ
一證トハスヘキナリ、ルコトハ、吉田社文書ノ祭礼記ニ、電宮郷田地在所濱
田トアリ、又水戸宮郷田地在所武熊堂トアリ、電宮郷
今ノ七軒所ナル三宝荒神ノ事ニテ、旧ハ今ノ淨光寺

口ノ外ナル塀ノ傍ニアリ、水戸宮ハ今ノ淨光寺口ノ
内ニアリシト云傳ハタルハ、此地ヲ浮ト云シコト
分明ナリ、殊ニコノ荒神ノ旧跡ノ側ナル矢来門ヲ出
テ、少々右ノ方ヨリ、コノ辺ニ軒屋、杉山口ナル浮柵ヲ
テノ間、堀ニ付タル路次ヲ浮新道ト称シ、又宇木柵ト
云モ、古名ノ残レルナリ、コノ浮柵ヨリ杉山宝鏡院門
前ヲテノ人居ヲ浮町トス、今多クハ宝鏡院門前ト云、亦一證
ナリ、仍テ考ルニ浮村ノ本郷ハ、コノ本城ノ地タルコ
ト必ズ、浮ヲ以テ名トスルモノモ、本城ノ地峙立シ

テ前後左右皆低ク、古ハスヘテ沼澤アリシ所ナレハ、
本城ノ地ノ、浮島ノ如ク高カリシヨリ名トセシト
見エタリ、古ハ嶋崎ノコトヲハスヘテ浮島ト云シナリ、常陸下総陸奥共ニ浮島ト云地ナリ、統世
継ニハ、隠岐ノコトヲ、凡テハ柵町ヨリ押廻シテ杉山
マテハ間スヘテ浮村ナリ、吉田文書嘉祿五年正応四
年等ノ下文ニハ、吉田社領宇喜郷トアリ、其余元徳中
ノ文書及藤王院文書仁治中ノ書ニ、宇喜郷ト注セリ、
吉田祭礼記ニハ、浮之郷トモ、浮郷トモアリ、サテコノ
城ヲ築キシハ、前ニモ云ニ如ク、馬場小次郎資幹ト見

エタリソレハ水戸明神ノ馬場アリテ其傍ニ家ツク
 リテ住ケルヨリ、称号トハナレト見ユ、サテコノ人
 大掾ニ任セシカハ、在職ノ間ハ、府中ニ在テ、コノ館ニ
 ハ子姓ヲ置テ守ラセ、職ヲ辞スレハ又歸住ケルユハ
 馬場大掾ト称セシト見エタリ、大掾傳記、助幹ハ惣
 領良幹ノ御遺跡ニ立、此御代ヨリ馬場大掾殿ト申ト
 アリ、コレヲ見レハ、哉代モ馬場ノ地ニ在リ、馬場大掾
 ト称セシト明ナリ、此傳記ハ近世ノモノニアラス、
鎌倉將軍ノ時世ニ書タルモノ
ト見ユ、凡家ノ称号トセルニ、少ノ地名ヨリ起レルモ、
人間々アリ、熊野新宮ノ鳥居ノ傍ニ居タルヨリ、鳥居

城屋敷ト云ト古
 及書ニアリ

氏トナリ、又大宰府天満宮ノ別當大鳥居、小鳥居ユレ
 ニ同シカルヘシ、平教盛ハ六波羅亭ノ門ノ股ニ家ヲ
 リシヨリ、門股中納言ト称セシタク、少ナカラス、サ
 レハコノ馬場氏モソノ類タルコト思フヘシ、大田ノ
 馬場村ハ、八幡宮ノ馬場ヨリ出テ、一村ノ名トナリ、小
 河ノ馬場モ、大宮明神ノ馬場ヨリ名ツケ、一村ノ名ト
 ナリ、トナリ、
セテ知ヘキコトナリ、但資幹以下ニ三代ノ間ハ、全ク城
 郷ト云ヘキホトノ事ニハアラテ、只居宅ノ体ニテア
 リシト見エタリ、スヘテ鎌倉將軍ノ比ハ、常ノ居宅ハ
 今ノ城郭ノ如クニテハ、ナク事アル
ニ臨テ、要害ノ地ニ扱テ、城ヲ築シ、コトナリ、然ルテ元
 弘建武ノ乱ヨリ、兵革止サリケレハ、常ノ居宅ヲ修築
 シテ、城郭トシ、或ハ更ニ要害ノ地ヲ撰テ、城ニ築シ、
 モ出来シナリ、時代ヲハカリテ思フヘキナリ
 資幹ノ男朝幹ハ、馬場太郎ト称シ、次男ハ、馬場二郎ト

云レコト傳記ニ見ユ朝幹ハ家ヲ継テ大掾ニ任シタ
レハコレモ馬場大掾ト云レト見エタリコノ支流ノ
馬場氏ノ者ハ後マテモ宇喜郷酒戸御箕河内郷等ノ
内ニ入地頭職タリシコト吉田父書元徳二年ノ書ニ
見エタリ九郎同四郎同口郎同左衛門二郎入道同左
衛門五郎子息武又二郎入道自去正和二年云々其河
村大祝名田畠内馬場六郎四郎貞幹兄弟等自去文永
十年云々宇喜郷内神主給田畠在家馬場御門二郎
入道同十郎等自去文永年中云々酒戸郷弘徳元年八
月口口日十月廿七日公家御祭并四月廿九日九月廿
九日關東別願御祭等馬場与一同四郎同小二郎トア
リ宇喜酒戸ハ皆古ノ吉田郷ノ内ナリ其河モ近接ノ
地ナリサレハ馬場氏ノ者ハ口ノ水戸ノ近里ニノミ

アリシコト思フヘシサレハ本城ノ地ハ古ノ資幹朝
馬場館タルコトウタカヒナキカコトハ古ノ資幹朝
幹ノ支流ノ内ニ宇木氏アリシコト傳記ニアリコレ
ハ宇喜郷ノ内一弘ノ地頭タル馬場氏ノ別荘ニケモ
アリシナルヘシサレ館ヲ馬場ト称セルモモト水戸
明神ノ馬場ヨリ出タル名トミユレハ又水戸館トモ
云レナルヘシサレト古ハ今ノ如ク都府ノ名ト成タ
ルニハアラテ只居館ノ名ナレハ廣ク世ニ聞エヘキ
所謂モナケレハ馬場館水戸館ト云コトハ古書ニ
見エサルモ疑フヘキニアラス且大掾家ハ在職ノ間

ハ、必府中ニ居テ、コ、ハ、実ニ居宅ナカラ、別荘ノ体ニ
テアリシト見エタリ、府中城ヲ石岡城ト称シ、麻島城
ヲ吉岡城ト云、久米城ヲ小尻城ト云ハ、古名ナレト、世
ニ知ル人ナキハ、コレ又城ノ名ニテ、一府ノ称トナラ
サル故ナリ、コレヲ准拠トシテ、水戸城ト云コトノ
古代聞エサリシヲ思フヘシ、府中ヲ石里ト云コトハ、
税所ノ文書ニ見エタルノ
ミニテ、古今知レル人ナシ、麻島ヲ吉岡ト云コトハ、多賀
谷ノ文書ニ見エシノミニテ、又知人ナシ、久米城ヲ小尻
城ト云由ハ、那須文書ニ見エ、国安城ヲ高館ト云ハ、六
藏寺本系図ニ見エ、額田城ヲ原中城ト云ハ、密藏院本
日口口原久コノニ城ハ、其比合戦アリテ、タマノハ、ソ
ノ文書ノ傳ハレルニテ、旧名ヲモ知ルコトヲ得タル

ナリ、此ノ文書ニ失タラハ、何ヲサテ占ノ中御門ノ肘
以テ旧名ヲ知ルコトヲ得ンヤ、サテ占ノ中御門ノ肘
木ノ内面ニ、応永七辰建始ト、六字ノ銘アリ、延享三年
ニ出タリ、此時ハ、大掾満幹ノ世ニ當レ、當時年戌ノ時
節ナレハ、修築ヲ加ヘラレ、要害ヲ固クセシト見エタ
リ、此比ハ、既ニ全ク城郭ト成テ、水戸城ト名ツケシコ
ト論ナシ、但一府ノ名ニハナラサリシナリ、江戸通房
コノ地ヲ領スルニ至テ、漸ク一府ノ称トナレリ、加倉
徳寺康正元年棟札ニ、水戸上郎ト云コトアリ、又和光
院年代記ニ、寛正ニ水戸藤福寺、岡山大且那通房トアリ、
リ、コノ比一府ノ名トナリシコト見ツヘシ、コノ年代
記明応三年ニ始メテ書写セシ本ニテ、其後往々書繼

ナルモサレト是時モコノ本城ノミニテコレ内城
ト称シ今ノ二之丸ハ宿城ト云テ門族及家士高買ハ
類モ雜居シ全ク外郭ナレハ今ノ大城ヲ以テ見レハ
十分ノ一ナリ今ノ水戸侯ノ御在城トナリテモ本城
ノ内ニ屋形アリシヲ寛永二年ニ二丸ニ移サレテヨ
リ是郭ニハ屋形ナシ詳ナルコトハ二丸ノ処ニ云テ其以前ノ事ニヤ
一奇談アリ蓬窓夜話云下原久

浄光寺門ト云テ此門三間梁間ハカリテ當城諸門
第一ノ間敷ナリ扉板ノ節ニ佛像ニ似タル節有テコ
レノ觀音節ト云テ古來相傳テ云テ幼兒ノ痰強キ或ハ寒
快氣ノ後煎豆ヲセシ茶ヲ備フヘシト祈申セハ必
平愈スト云テ密ニコノ事ヲナスモノアリト云テ

浄光寺廓

此廓ノ下ノ丸トモ本丸ノ中御門ノ外ノ郭ナリ佐竹
義直ノ築ク所ナリト云テコノ郭ノ門ニ浄光寺門ト云
常ニハ浄光寺口トモ云テ柵所ヨリ入ル処ナリ元禄
ノ令ニテ定メテ此門三間梁間ハカリテ當城諸門
第一ノ間敷ナリ扉板ノ節ニ佛像ニ似タル節有テコ
レノ觀音節ト云テ古來相傳テ云テ幼兒ノ痰強キ或ハ寒
快氣ノ後煎豆ヲセシ茶ヲ備フヘシト祈申セハ必
平愈スト云テ密ニコノ事ヲナスモノアリト云テ
此廓モ本丸ニツハキテ古ノ浮村ノ内トシ本丸ノ所

コ、ヲ淨光寺廓ト云ハ、今ノ那珂郡湊村ノ衆法山淨
光寺ノ旧跡ナレハナリコレハ一向門徒ニテ俗姓梅
原氏ナリ其祖唯佛那珂郡枝川ノ地ニテ開基セシテ
江戸氏水戸在城ノ時其時代詳ナラス歸依厚カリケレハ此
地ニ移サレシテ天正中江戸没落ノ後モ此処ニ在テ
佐竹氏ニ信仰アリシニ文祿中水城修築ノ時、常葉
村ニ移シ其跡ニ繩張シテコノ郭ヲ築カシト云コ
ノ寺十四代唯空ノ代ナリ慶長中湊ニ移リ詳ナル
由ハ那珂郡淨光寺ノ処ニ
アリコノ由来ハ淨光寺記祿
及谷田部通壽半記ニコレハ此郭内ニハ今ハ小吏

ノ役所アリ

水戸明神旧跡

淨光寺門ヲ入テ右ノ高岬ノ辺ニ池
水アリ周匝十余歩アリ尤清冷ニシ文昇歳ヲモ竭
ルコトナシト云多ク石菖蒲ヲ生ス長キモノハ三尺
余寸ニ至ル古老相傳テ云昔水戸明神祠此地ニアリ
此池ハコレ其御手洗トリト云水戸祠ハ後ニ吉田神
社ノ境内ニ移ル其末社ナル故ナリ温故録水戸
考等ニ見ユ
月見甚盛明星松古老ノ傳説ニ今ノ猪山御藏ノ土
水戸祠跡ノ近キ所ハ古月見臺ト稱シテ江戸家在城

ノ時江戸氏毎月廿三夜二月之拜ヒシ地ナリト云其
地ニ明星ノ松トテ江戸家此城ヲ乗取リシ時廿三夜
勢至尊ノ灵験アリシテ依テ代々信仰セシ処ナリト
テ大ナル松ノ老木アリシト云然ルニ今ノ水戸侯ニ
ナリテ明星ノ明城ニ通シテ音便不吉ナリトテ寛文
ノ比伐捨ラレシト云谷田部通壽洋記館氏
由来書及温故録ニ見ユ

二之丸

和光院年代記云明
正五當宿大後立初同
丸當宿大後祇園初ト
アリコニ丸内ナリコレニ
ヨハ明志中始テ宿城
ヲコレラハタル故ナリ
祇園ハ市中ニテ祭ル
モノナレハナリ

宿城ノ事 六藏寺
過去帳ニ宿城助節
道益殿於小場打
死トアル事録三ノ
比ニテ宿城ノ称トセ
シナリ又御宿信濃
守ニテ宿城ニ居ル
故ノ事リ館氏由緒
書ニ信濃守ノ宅ハ二
九ナリト云シハナリ
佐竹三九ノ築キテヨ
リ中城ニナリタルナリ
和光院過去帳ニ道

古ハコレヲ宿城ト云テ外構ナリ江戸氏ノ時ナリ和
六藏兩寺 佐竹氏ニ及テ中城ト云 水戸家記ニ見ユ丸
過去帳 城トモ云ニ丸ヲ中 本丸ヲ実城トモ内
城ト云ハ古代ノ詞也江戸家ノ時ハ外郭ナリ又佐竹
義宣ノ時文祿中ニ築ク所ナリ大寺橋室珠形銘ニ文
造之トアリ國誌ニハ文祿三年以旧城狭隘改築水戸
城為大都トアルニヨレハ三年ヨリ五年迄ニテ落成
トミエタリ以テ古老ノ説ニ本丸ト二丸ノ間ハ往古ハ往
来ノ大道ニテ今ノ柵町ノ不問門ノ辺ヨリコハヲ
經テ海老窪へ出テ船戸へ出今ノ中山家ノ屋敷下青
柳村へ渡リシト云温故録 江戸氏在城ノ時ノ事ト見

天正十七年己丑
月廿宿城屋長
門守上ル己御
宿信濃守カコトナ
リ

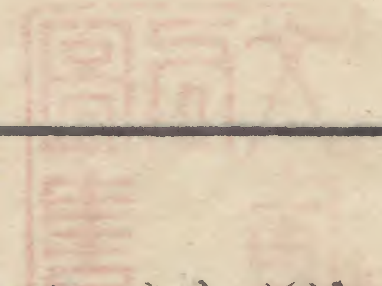
エ夕リ、コノ往来ハ、モト吉田郷ノ辺ニテ、本丸ハ吉田
ニ属シ、二之丸ハ常盤郷ニ属セシト見ユ、往古コノ郭
ノ地ハ、坂アリテ、大坂ト云シナリ、コノ辺ニハ、江戸家
ノ時ニハ、外郭ニテ、家士ノ内、大身ノ者住居シ、又町家
モアリシト見エテ、宿ト称セシナリ、和光院詳代記ニ
見エテ、下ノ祇園日
跡ノ所、又天王廓トモ、天王小屋トモ、
覚帳云シトナリ、
佐竹氏ノ時ヨリ、今ノ水戸侯ノ初代ニテ、ハ家士ノ内
大家ノ者居住セシト云、然ルニ、寛永二年木城ヨリ屋
形ノ此廓ヘ引レテ、其節ヨリ家士ノ居宅ハ、三之丸及

佐竹ノ時ニテ、三之丸諸
士ノ住居シテ、町人ハ、元銀
町大町中町西町辺ニテ
ト見エテ、リヨ三所名
ハ、佐竹ノ時名ケ
シテ、リアア所ア三所
ナト、今ノ水戸侯侯
永ニ立レシ町ナリ

其以外ニナリ、元白銀町大町中町西町辺ハ、町人ノ居
宅ナリシヲ、田所今ノアテ、町アテ、木町今ノナリ、
シ、其アトハ、諸士ヲ置タリシト見エ、名ノ、
温故録水戸
不疑ニ
家記ニ、寛永二年乙丑年水戸御中、城御作事正月十一
日ヨリ、初ル、芦澤伊賀守信重城代ト成、後、是城代二人
ト成トアリ、是ヨリ先鈴木石見守重好元和四年ニ城
代トナサレタシハ、コノ時ヨリ本丸ニ九ヲ分守リシ
ト見エタリ、重好五千石信
重三千石ヲ領ス、郷村旧記ノ内ニ、寛永二年
三月十九日水戸家ノ老臣中山備前守信吉村瀬左馬

助重治三木仁兵衛之次芦沢伊賀守信重連署ニテ郡
奉行並代官へ贈リシ状アリ其状ニ今度水戸御作事
ニ付中島土佐大工共召連羅下候トアリテ又伊藤玄
蕃普請奉行ニ命セラレシ由アリハ甲州武田ノ浪士
ニテ慶長九年伏見ニテ始テ神祖ヨリ御附属アリ
シ七人ノ一トリ
コノ西書ニ依テ考レハ寛永二年ハ大造ノ管作アリ
リテ本城ノ屋形ヲコ、ニ移サレシハ見エテ中島
ハ大工棟梁ナリ水戸ニ在テ死去セリ妙雲寺過去帳
ニ法林院妙葉寛永四月十五日中島土佐トアリ
コノ時ノ作事ハ大概杉柱松板ニテ鎗鉋ヲ以テ削リ

タルナリト云ヘリ然ルニ明和元年十二月廿七日ノ
夜右筆方ヨリ失火アリテ屋形三階共ニ炎焼シタリ
但白洲前ノ中御門御囲ナト称スル西々ハ災ヲ免カ
ルコノ門ノ破瓦口ノ紋ハ武田菱ナリト云萬千代君
ノ時ノモノヲ用 其後殿閣修造成就シテ結構古ニ陪
ヒシト見エ
セリ三階櫓モモトハ三階物見ト云シテ、時ヨリ
三階櫓ト称シ、櫓ヲモ始テ上夕リ此櫓ハ播州姫路ノ
殿主四分一ノツモリナリト云 大工頭搦本氏ノ先祖
数梁桶ノ事等具ニ見聞セシテ、
家傳ニ傳ヘ、此時其法ヲ用シト云



長四尺五寸

棟

水戸大城

明和元年甲申冬十二月二十七日

大城災殿樓無遺時

良公在藩乃命土木之事

嗣君繼謀營築先自玄閣始以

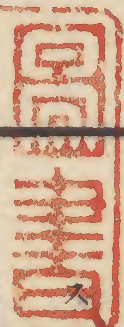
三年丙戌十月朔上棟

建

柵町へ出ル門ヲ柵町門ト云、元禄三俗ニ不閑門ト称

年ノ令

不閑門ト称

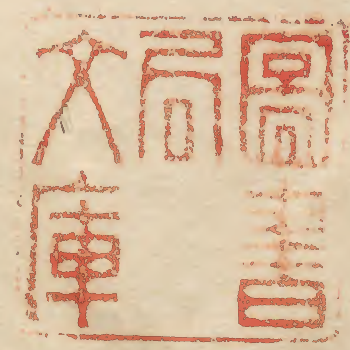


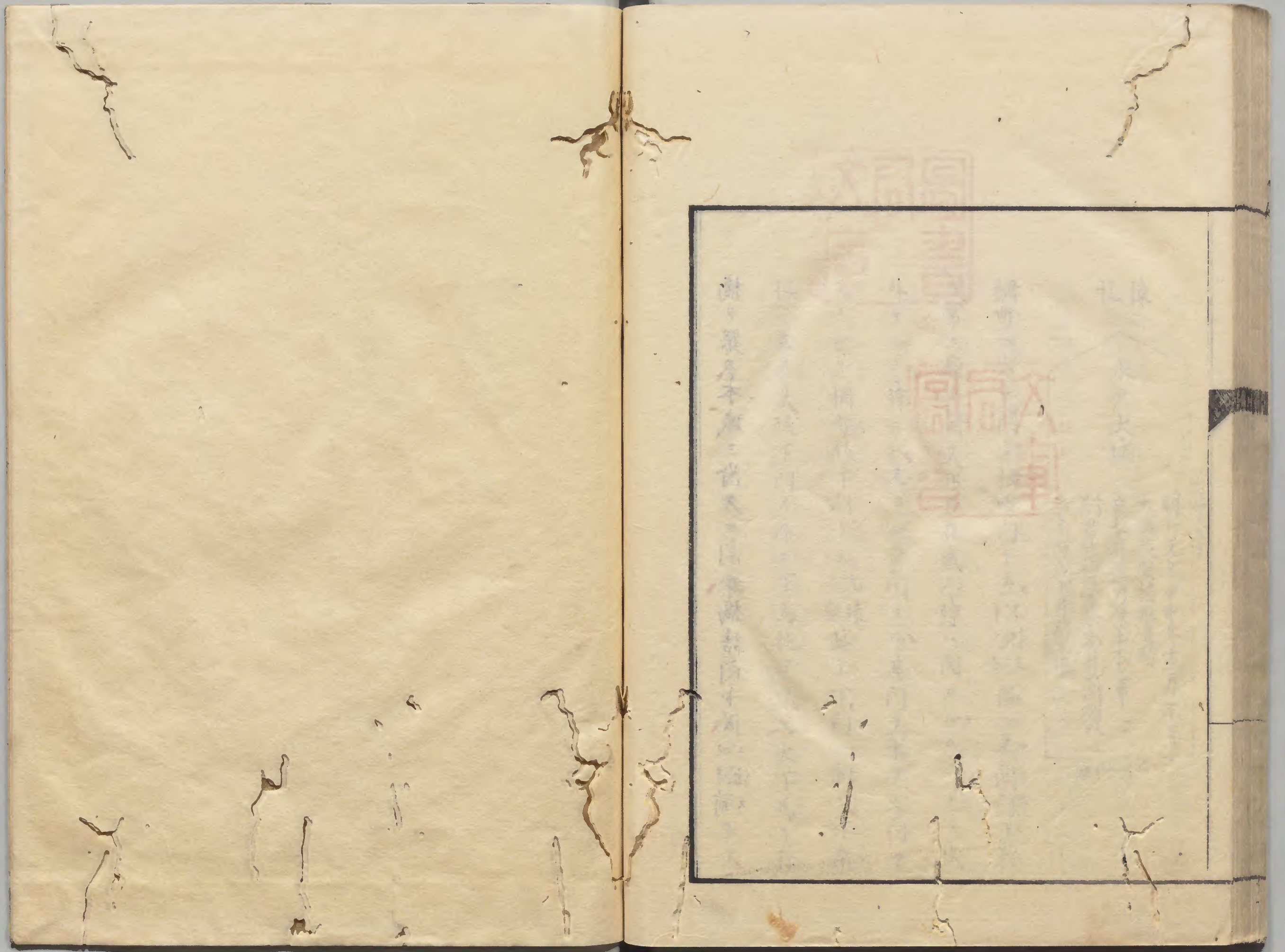
外アルノ時ニハ又コレヲ閑ラシ其門ヲ下ヲ又門ア

礼ヲ立タリ、後下門ノ外ニ下馬札アリ又大下馬ト称

シテ長屋アリニ之丸ヨリ本城へ移ル間ニ堀アリテ

橋ヲ架ス、本城ニ附タル門ハ橋詰門ト云、已ニ前ニ注ス





國立公文書館

